

復古文化指數

星新一著



女子  
生活  
指數

星  
新一著

新  
潮  
社

## 気まぐれ指数

昭和38年10月10日 発行  
昭和47年10月10日 10刷

著 者 星 新 一

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 162  
東京都新宿区矢来町71  
電 話(260)1111(大代)  
振 替 東 京 808

¥350

印刷・塚田印刷株式会社 製本・植木製本所  
乱丁本はお取替えいたします

© Shinichi Hoshi Printed in Japan

序	悪	ある神学	手帳	電話	アンテナ	二十万円	賭	友引	紙屑	作品	決算期
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
五	二六	四	九	八二	九	一〇九	一五	一四	一六	一七	一八

插装  
画帧  
金  
森  
馨

気まぐれ指数



## 序 曲

東京タワーの根もとのあたりは、対比のはげしい種々のものがまざりあっている地域である。たとえば、豪華なホテル、戦災をくぐりぬけた落着きのただよう古い家、ゴルフ場、小さな森、寺と墓地、外国の旗のひるがえる大使館、坂、学校、各種のアパートなど。

タワーの展望台から見おろした人たちは、よくもこう雑然とした配列ができあがったものだ、といった意味のことをつぶやきながら、そなえつけの望遠鏡を気のむくままに動かしはじめる。そして多くの人は、ふと、こんなことを考えてみるのではないだろうか。いまレンズの視野を、ちらっと横ぎったアパートの一室。あんな所に住んでいるのはどんな人で、どんな生活をしているのだろうか……。

……そこには、こんな人が住んでいた。三十を少し越したぐらいの、ひとりの男。

コンクリート造りの、まだ新しい四階建てのアパート。

彼の室はその最上階のいちばんはじにあつた。小さな台所と浴室とを除けば、ほぼ十畳の一室。彼はそれを三つの部分にわけて使っていた。一角には眠るためのベッド、一角には来客用の机といくつかの椅子。残った窓ぎわの部分にはメモの散らばった大きな机があり、彼はそれにむかつて椅子にすわっていた。

その仕事机の片隅にある電話機に、彼は手をのびしダイヤルを廻した。

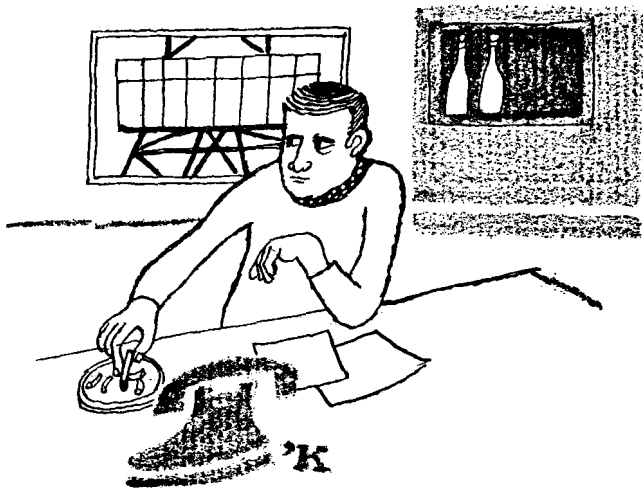
「黒田ですが、このあいだのはどうだったでしょうか。え、好評？ それで安心しました。ええ、ちょっと気になったので……」

短かく話し終って電話を切り、彼はふたたび今までの姿勢にもどった。退屈しているような、また何かを考えているような、あまり例のない表情で、煙草の煙を吐きはじめた。

窓のそこには午後の陽を受けたタワーが見える。このア







パートは都電の通りから少しひっこんだ場所にあり、騒音はそう伝わってこない。

彼は視線を窓のそこから机の上に移した。そこには白い紙がひろげてあったが、便箋でも原稿用紙でもなかった。ただの白い紙。彼は鉛筆を手にして四角を描いたが、すぐにそれをやめ、また、ぼんやりと窓に顔をむけた。

その時、プザーの音が来客を告げた。立ちあがった彼の顔からは退屈の色が消えた。そして、鍵をはずしてドアを開けた。

「こんにちは……」

そこに立っていた二十七、八の女性がなれなれしくあいさつをした。細おもての容貌は美人と呼べないこともなかったが、服装のほうは最新の流行とは呼べない、むぞうさなものだった。

黒田は相手を見つめながら、しばらくまばたきをつづけた。今までに会った記憶のない女性だった。だが、いつまでも黙ったままにいるわけにはいかない。

「どうぞおはいり下さい。とここで、どなたでしたでしょうか」

黒田は彼女をなかに迎え入れ、来客用の椅子<sup>いす</sup>をすすめながら聞いてみた。

「あたし、こういうものですよ」

彼女は手にさげていた四角い鞆をあげ、名刺を出した。

名前は副島須美子、肩書きにはフロリナ化粧品会社と印刷されてあった。彼は黒田一郎という自分の名刺を渡しなごら、

「化粧品会社ですか。それで、どんなご相談なのでしょう」

と言ひ、仕事机から紙と鉛筆とを取ってきた。彼女はそれを見て、ふしぎそうな口調でさえぎった。

「あら、メモなんかして下さらなくていいのよ、あたし、化粧品を売りにうかがったのですから」

黒田は苦笑しながら、うなずいた。

「ああ、セールスマン。いや、セールス・ガールかな。いったい、なんと呼んだらいいんです」

「あたしも知らないわ。ところで、フロリナ化粧品会社では、特殊な原料をフランスから独占的に輸入し、それに……」

須美子は鞆の中からクリームを一つ取り出し、机の上に置いて話しはじめた。だが、やがて口をつぐみ、部屋をみまわした。

「どうしたんです。忘れたんですか。虎の巻を見ながら喋

っても、かまいませんよ」

「そうじゃないのよ。奥様はいらっしゃらないの」

「独身だから、いるわけがない」

「ひとり暮しの男性に口紅のたぐいを売ろうとするなんて、幽霊にズボンを売りつけようとするのに似ているわ。長居は無用ね」

と化粧品を鞆にしまいかける彼女を、黒田はとめた。

「いいじゃないですか。せっかく喋りはじめたのを、途中でやめることもないでしょう。欲求不満で心に悪い影響が残るかもしれない。終りまでやってしまつて下さい」

「じゃあ、そうするわ。ええと……おたくでは、どんな化粧品をお使いでしょうか」

黒田は壁の棚から、クリームの容器を取ってきて渡した。

「こんな品ですよ」

受けとった彼女はラベルを見つめた。横文字ばかりが並んでいた。

「外国の製品をお使いになるのも結構ですが、それではお肌……」

須美子はまたも口をつぐんだ。ラベルの隅に、小さくメイド・イン・ジャパンと記されているのを発見したのだ。

「国産のをお使いになるのでしたら、やはり一流の品でな

いと、よろしくごさいませぬ。フロリナ社の品はこのように……」

と彼女はまず、自社の品を少し手の甲に塗りつけてみせた。つぎに、いま渡された容器のふたを、なにげなくねじった。そして、目を大きく見開き、かん高い悲鳴をあげた。

クリームのふたが飛び、なかからネズミがあらわれたのだ。つづいて、うなるようなネコの鳴き声が出た。須美子は容器を思わず床の上にほうり投げた。しかし、よく見るとオモチャのネズミで、ネコの声もそれが出したのであることがわかった。

「ビックリ箱ね。おどかさないでよ」

黒田は身をかがめ、容器を拾って、底から銀紙に包んだものを取り出した。

「まあ、これでも食べて下さい」

だが、彼女は手をひっこめた。またも変な品をつかまされては、たまったものではない。

「なによ、それは」

「ブランドーの入ったボンボン。卒倒でもした場合のために、気つけ薬としてセットになっている。大丈夫です」

彼女はおそるおそる手に取り、紙をむいてそっと噛んで

みた。しかし、べつに変なことはなかった。チョコレート  
の味とブランドーのかおりが、口のなかにひろがっていつた。須美子はやっとわれにかえり、そこで憤慨にとりかか  
った。

「ずいぶんいやらしいビックリ箱があるものね」

「そうかな。面白い、うまくできた仕掛けだと思うがな」

「いやらしいわよ。こんな人の悪いビックリ箱を、考え出した人の顔を見てやりたいわ」

「顔を見てどうするんだ」

「ひっぱたくでしょうね。知っているの、その人を」

「知っているどころか、このほくさ」

そのとたん、彼女の手は勢いよく動き、黒田の横顔で大きな音をたてた。だが、彼はあまりあわてなかった。しばらくじっと、須美子を透して椅子の背を見つめているような目つきをしていたが、

「ちょっと失礼」

と立ちあがり、仕事机にむかい紙に何かを書きとめた。

彼女はそれを疑問と驚きと、いくらかの不安のまざった表情で眺めていたが、ついに声をかけた。

「痛かったらあやまるわ。だけど、なにを急に書きはじめたの」

黒田はすぐに戻ってきて答えた。

「仕事のことさ」

「仕事って、どんな？」

「じつは、ぼくの親戚が輸出用のオモチャを作る、小さな工場をやっている、その企画を受けもっている。主としてビックリ箱だけだね。それがぼくの仕事さ。だから、頭に何か浮かぶたびに、すぐにメモをつけることにしている」

「で、いまは何を思いついたわけ」

「女が男をひっぱたく美風は、アメリカにあるけど後進国のわが国にはない。その習慣のちがいに気がつかなかった。だから、女をひっぱたくビックリ箱を作れば、アメリカの男性が喜んで買うかもしれない。どうだろう」

須美子は首をかしげた。

「あたしには何とも言えないわ。だけど、ビックリ箱の考案なんて、また変ったお仕事なのね」

「はじめは月給をもらって、工場の企画室に通動していた。だがある日、すばらしいアイデアを考えついた」

「どんなこと？」

「通勤の必要がないということさ。また、月給をやめて歩合制してもらった。親戚の社長はいやな顔をしたが、よその工場から誘われていると嘘をついたら、笑顔になって

要求を入れてくれた。よっぽどもうかっているらしい。それ以来、かくの如き生活に落ち着いている。さっきは、それを伝え聞いた化粧品会社が、景品の相談か何かで、きみをよこしたのかと思つたよ」

煙草の煙とともに黒田の口からでる話を聞きながら、須美子はあらためて室内をみまわした。

「ちょっと考えるだけでこんな生活ができるなんて、いい仕事ね。のんきそうで、うらやましいわ」

「のんきとは言えないよ。なにしろ、大火事とか飛行機事故といった、大金を消費する驚きが競争相手だ。こっちは金をかけず、それに匹敵するショックを、何十万人という人に定期的に供給しなければならぬんだから、楽じゃない。工場を遊ばせないためには、怠けてもいられない。また、値段の点や危険性などで製造中止になる場合も多いから、予備をいくつも用意しておかなくてはならないし」

「かもしれないわね。でも、自由でいいでしょ」

「つとめていた頃には自由にあこがれたが、今ではなにが自由かわからなくなった。自由のありがたさを知るために、人は時どき牢に入る必要がある。有名な金言だ」

「聞いたことがないわ。あなたの製造でしょう」

「寝ても覚めてもビックリ箱のことだ。といって、眠らな

ければならない。睡眠時間をいろいろ置きかえてみたあげくに、結局、つとめていた時と同じになった。あこがれの自由の正体さ。そういうきみの仕事だって、同じようなものじゃないか。時間にしばられず、ひとの虚をついて金にする。きみは自由をどう味っているんだい」

黒田は逆襲したつもりだったが、彼女からはあまり手ごたえのない答がでた。

「知らないわ。きょうが初めてなのよ。あたし、彫刻家になろうと勉強しているの。だけど、世の中から浮きあがった芸術家にはなりたくない。大衆との接触とやらを試みようと思つて、退屈しのぎも兼ねて化粧品会社の人員募集に出かけてみたのよ。容器のデザインでもやらせてもらえるかと考えていたわ。それが、行ってみると、このおよそ美的センスのない品と、スピード印刷の名刺を押しつけられちゃった」

「なるほど、きょうが初めてだったのか」

と、黒田は笑いながら、うなずいた。須美子もまた、笑い、うなずいた。

「ええ、急ぎの配達をたのまれて、この近くで一軒寄ったけど、訪問はここが第一番目よ。こんなアパートなら暮しむきのいい人が住んでるだろうと思つて、意気込んで、ま

ず入つてみたら……」

「独身の男ではね。気の毒なことをした」

「それにビックリ箱ときてはね。こんなけちがついては、先が思いやられるわ。初日に負けた横綱の心境と同じよ。あたし、店じまい引退しようかしら」

「なんだか同情したくなつてきた。じゃあ、マニキュアの液でも買おうかな。仕事が行きづまった時に、万年筆のペン先に塗つて気晴らしをしよう。いいアイデアはそんな場合に湧いてくるものだ。わが国に獨創性が乏しいのは、深刻な姿勢で考えるからだろう。アインシュタインが原爆のヒントを得た時は……」

「いいのよ、そんな無理しなくつても。あたしは自己の信念に忠実なの。もつとも、気がむかないことをやらない、という信念に対してだけど。早く言えは怠け者つてわけね。じゃあ、おいとまするわ」

須美子は化粧品を鞆にしまい、椅子から立ちあがった。

黒田はそれをひきとめた。

「まあ、いいじゃないですか、ゆっくりしていても。本当に店じまいのつもりなら、急ぐこともないでしょう」

「でも、忙しいお仕事邪魔しては……。どことなくあいに忙しいのか、実感がちつとも湧かないけど」

「邪魔どころか、話し相手があつたほうがいい。一人であれこれと考えていると、どうしても独断的になってしまふ。妙にこりすぎたりしてね。作つた本人だけが驚くビックリ箱など、意味がない。うぬぼれ女の装い、前衛映画のたぐいだ。普遍性のない大傑作とやらを作る立場にはないんだ」

「そういうことも言えるわね」

「雑談が必要品なわけさ。費用を出しても、雑談の相手を雇いたいんだが、なかなかない。将来は、雑談学科の卒業生が胸を張って枢要な地位に就職する時代になるのだから、当分はだめらしい。したがって、来客をつかまえる以外にない。しばらく話し相手になってくれないかい。ただとは言わない。夕食ぐらい、そのへんでご馳走しよう」

「悪くないアルバイトね」

須美子はふたたび椅子にすわり、少しくつろいだ姿勢になつた。

「じゃあ、お茶でもいれよう」

黒田は台所に立つた。そして、魔法瓶の湯でインスタント・コーヒーをいれて運んできた。彼女は軽く礼を言い、一口すすつた。

「なんだか変な生活ねえ。まともな仕事について、結婚でもしようなんて、考えてみたことはないの」

「あるさ。このあいだ、まともな仕事とはなにかを調べようとして、古本屋で十年まえの経済誌を買ってきた。半日はどつぶして、現在とくらべてみた」

「なにか結論が出て？」

「ああ、安定した事業というものが、いかに少いかがわかつたよ。ビックリ箱の産業は、なかなかどうして、一流の堅実な仕事だ。社会がどう変わろうと、当分はビックリ箱への需要はなくなるらない」

須美子は、コーヒーを飲みながら、あたりをまたも眺めた。

「でも、独身だと不便でしょう」

「あいにく、女性がどんなに便利なものか知らないんでね。電気掃除機や冷蔵庫の便利さは、テレビのコマーシャルでいやというほど知らされ、買ってしまった。それなのになぜ、女性の便利さをコマーシャルでやらないのだろう」

「コマーシャル以外で、十分にやっているからでしょうよ」

「やってはいないよ。恋愛物では結婚式で話がおしまいだし、スリラー物では細君に殺される。西部劇では女のあさはかさのため主人公が毎回、危地に追いやられる。喜劇物では細君の尻に敷かれる筋ばかりだ。女性の便利さは少しも強調されていない。このままでは、まじめな男性はみな

独身主義者になるだろう。ぼくのように」

「どうかしらね」

と笑う彼女に、黒田は聞いた。

「きみはどう考えているんだい。自分自身、そんなに便利な装置だと思っているのかい」

「あたしもわからないわ。あたしもまだひとりだし、それに、便利な装置というものは使う人の能力と判断できまるものよ。原始人は電気計算機を手に入れても、ありがたさがわからないじゃないの。男って、原始的なところが多いわね」

「馬鹿とハサミは使いよう、ってところだな」

「ハサミじゃないわよ。電気計算機」

「同じようなものなんだろうな。十万年後の博物館では、その二つが同じころの物として並べて陳列されることになるかもしれない」

「いままで、結婚しようと考えたことはないの」

「ないこともないが、工場から次々と考案のさいそくをさされては、愛の言葉など浮かんでこないよ。デイトの相手がビックリ箱に見えてくる」

須美子は軽く手を叩いた。

「その、女性すなわちビックリ箱説はいいわよ。女性を便

利さで判断しようとするから、オートメーションの今日、話が少しおかしくなるんだわ。どんなにいばっても、いずれは機械に追いつかれ、追いつかれてしまうわ。自動ネクタイ結び器かなんかの完成で、失業じゃあ、前途は暗いわ。この説をもっと検討してみない」

「賛成だ。唯物的な見方には、面白味がない」

「女性の本質をビックリ箱と考えれば、いちおうの安心が得られそうだわ。女性たるものはこの点を認識して、機械と競争する便利な装置なんかになろうとせず、すばらしいビックリ箱になろうと努力しなければならぬ。そうすれば、永久に一流の安定企業でいられる。さっきのお話の通りでしょう」

須美子は途中、演説口調になった。黒田は何本目の煙草に火をつけながら、

「理屈はどうにでも立つものだというのが、妙な話になってきたぞ。しかし、一理はある。男は女のビックリ箱的なところに魅力を感じているのだからかな。このうえ、そんなことに目ざめられたら、男たちは困るだろう。その安定企業によって、ますます金を吸いとられ、寿命をちぢめることになる」

「男たちなんて、ひとごとのおっしゃるけど、黒田

さんはどうなの。女性に対する見方が変って、少しは心境が変りはじめた？」

「いや、あまり変らない。ビックリ箱に關しては不感症になつてゐる。人工ビックリ箱も天然ビックリ箱も同じことだ」

黒田はこう言いながら、窓のそとを見た。いつのまにか時間がたち、夕ぐれの色がひろがりはじめていた。東京タワーの展望台には、電気がつき、そのさらに上では光の輪がぐるぐる廻つてゐた。

須美子は立ちあがつて、窓べに寄つた。

「きれいな眺めね」

「そろそろ出かけようか」

「こんなくだらない雑談をして、それでご馳走になつては悪いわね」

「くだらないから価値があるんだ。有益な説なら、本屋で本を買えばいい。ちょっと服を着かえるから、その棚にある試作品でも眺めていてくれ。なかにはこわれているものもあるかもしれないが」

黒田は箱のいくつか並んだ棚を指さしてから、洋服ダンスを開けた。そして、着ていた服をしまい、外出用を選ばはじめた。

須美子は好奇心を持って、棚に近づき、箱のひとつにこわごわ手を伸ばした。なかが出てくるのだろうと、深呼吸をして、ふたにさわつた。

ばたん、と音がし、一瞬のあいだに自動的に箱は畳まれ、一枚の板になつてしまつた。

「ちよつといいアイデアね」

彼は靴下を出しながら答えた。

「ああ、輸出むけには、その程度のがいちばんいい。外国では贈り物を目の前で開ける風習があるから、軽い冗談にすぐ使える。日本ではあとであけてみるのが習慣だから、冗談ですまなくなる場合もある」

「お中元なんかで、よその家に廻したりしたらね」

「きみの女性ビックリ箱説に従えば、内容充実と思つて結婚したら、ガッカリというたぐいさ……。あ、組立てなくていいよ」

須美子は畳まれた箱はそのままにして、となりの意味ありげな箱にさわつた。

いかにもビックリ箱らしい外観だったが、さわつても別に変化はおこらなかつた。彼女は棚からおろし、そつと手にとつて、ふたを開けようと試みた。しかし、なかなか開かなかつた。こわれているというのは、この箱かもしれない



いわ。振ってみたりしたあげく、須美子はこう考えて、もとの位置にもどした。

その時。大きなうなり声とともに、箱はバネ仕掛けで飛びあがり、床に落ちた。

「あら、びっくりしたわ。故障品だとばかり思っていたのに。死人がむっくり起きあがったみたいね」

「そんな感じをうけたかい。しかし、そのヒントはムジナの化かしかたから思いついたものだ。いつ出るか、いつ出るかとびくびくさせておいて、結局出ない。やれやれ助かったと、ほっとしたとたんに、わっと出る。相手は腰が抜け、ぐにやぐにやになってしまふ。昔から偉大な為政者は、よくこの手を使ってきた」

須美子は箱を拾いあげ、もとの棚にもどした。しかし、箱は今度は跳ねなかった。

「ずいぶん手がこんでいるのね」

「その程度が限度のようだ。それ以上になると、マニアむきになってしまふ。通人は喜んで、金にはならない」

黒田は靴下をはきおわり、立ちあがって鏡にむかい、服のエリのあたりをちよっと直した。それから、ポケットのハンカチを新しいのに入れかえた。

「では、出かけようか」

「マニアむきになって、どんなの。あつたら見せてよ」

彼は棚のはじにある、黒っぽい箱を指さした。

「そこにある。アメリカカのベル研究所が考案したものだけあって、実に精巧にできている。そのかわり、値段も高く、むこうでも五ドルぐらいする。こうなると、マニアぐらいしか買わないから、あまりもうからない」

黒田はこういい、箱を机の上に置いた。黒ぬりの金属製の箱で、上部にスイッチがついている。彼は指でスイッチをおこし、へ点にした。きしむような、不気味な音がはじまり、須美子の注意をひきつけた。

「お化けでも出そうね」

「出るかもしれない」

やがて、ゆっくりと箱のふたがもちあがり、なかから青ざめた手があらわれてきた。なにをやるのだらう、と見ているまえて、その手はスイッチにたどりつき、それを倒してへ滅にした。音はやみ、手は箱のなかにもどり、ふたはしまった。もはや、なにごともおこらない。

「いやな感じね」

「名作といわれるだけのことはあるよ」

「虚無的な印象を受けるわ」

「自分のスイッチを切るだけの装置、自己の存在を否定す